



「ゴスペルDeejay」による「キリスト教徒」男性イメージ構築：男性イメージの操作が社会に与える影響についての人類学的試論として

二宮，健一

(Citation)

神戸文化人類学研究, 3:3-32

(Issue Date)

2010

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003421>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003421>



「ゴスペル DeeJay」による「キリスト教徒」男性イメージの構築
— 男性イメージの操作が社会に与える影響についての人類学的試論として —

二宮 健一

はじめに

現在、ジャマイカでは「キリスト教徒」の若者たちの間で「ダンスホール・ゴスペル」と呼ばれる音楽が人気を博している。「ダンスホール・ゴスペル」とは、簡単にいえば、ジャマイカのポピュラー音楽「ダンスホール」の音楽要素を取り込んだゴスペル音楽である。その歌い手は「ゴスペル DeeJay」と呼ばれ、多くの場合、劇的に回心をした「キリスト教徒」男性である。「ダンスホール・ゴスペル」や「ゴスペル DeeJay」は、若い「キリスト教徒」を中心に支持を得ているが、その一方で教会コミュニティ内外から批判や疑惑のまなざしも向けられている。

本論では、現地調査で得られた資料¹⁾をもとに、この「ゴスペル DeeJay」によって体现される男性イメージ²⁾が教会コミュニティにどのような影響を与えているのかを明らかにする。これは人類学的な男性性研究において次のような意義を持っている。

人類学的な男性性研究は、様々な文化における「男らしさ (masculinity)」の遂行/演出 (perform) のされかたに注意を払ってきた [Gutmann 1997: 386]。このような研究は、特に「マチスモ」と呼ばれる男性の行動規範が注目されるラテン・アメリカや、「名誉と恥」と呼ばれる男女の行動規範が注目される地中海地域で多く行われてきている [Gutmann 1997, ギルモア 1994]。これらの社会に生きる男性たちの間では、理想的な男性イメージにどのように自己イメージを近づけるか、そしてそれを他者の前で遂行/演出するかが大きな問題となる。

ところが現代的文脈においては、これまでの人類学的な男性性研究が研究対象としてきた伝統的な文脈の場合とは異なり、男性イメージは遂行/演出されるだけでなく、操作の対象にもなる。

本論で扱うジャマイカでは、1990年代に現地の西インド諸島大学が、それまでジャマイカ人男性³⁾に付されてきた「周縁的」⁴⁾「無責任」といった否定的ステレオタイプの見直しを目的として、男性のジェンダー役割や規範意識、社会化についての調査研究プロジェクトを行った。さらにはその男性イメージを操作しようとする動きも、微弱ながら存在した。1991年には、西インド諸島大学の人類学者で、上記の調査研究プロジェクトの中心人物でもあったシェバンスが、「ファザーズ Inc. (Fathers Inc.)」を創設している。この団体はワークショップやセミナーなどを開いたり、毎年「理想的父親 (Model Father)」賞の授与を行ってきた。その目的は、ジャマイカの父性 (fatherhood) に付されたネガティブなイメージを

問題として扱い、「ポジティブな父性のイメージを提示することにより、男性たちがよりよい父親になることを助ける」ことであった⁵⁾。これは男性イメージを操作することによって、現実の男性のジェンダー実践を変えていこうとする試みであるといえることができる。

このように男性のイメージを操作することで現実のジェンダー実践を変えていこうとする試みは、近年ますます盛んになってきている。例えば 2009 年 4 月には、青年スポーツ文化省 (Ministry of Youth, Sports and Culture) 内の「女性／ジェンダー問題事務局 (Bureau of Woman / Gender Affairs)」に「男性部 (Men's desk)」が設置されている。ワークショップなどを通じた啓蒙活動がその主な活動内容であるが、そのワークショップへの参加者が書いた新聞投書によると、このワークショップの目的は、「女性との性関係がなければ本当の男にはなれない」というようなステレオタイプを捨てさせることであった。また 2009 年 10 月からは毎週日曜日の朝に『本物の男の事々 (Real Man Things)』という男性の問題を話題にするラジオ番組の放送が行われ、人気を博している。この番組ではレクチャーではなく、視聴者参加による「本物の男」との対話を通して男性の振る舞いを変えていくことが目指されている。

男性性研究から男性運動、政府の取り組み、メディアでの啓蒙プログラムへとつながるこうした動きの中では、男性の周縁性、父親役割の不十分さ、女性に対する暴力、などが問題とみなされ、それを変えるために男性イメージの操作がなされている。このような男性イメージの操作は、ジャマイカに限らず、世界各地で行われている男性性研究や男性運動の中にも見られるはずである。加えて、このような研究や運動とは直接的に関係ない文脈においても、テレビ、小説、映画などによって従来とは異なる新しい男性イメージが描かれ、称揚されることが少なくない。このような男性イメージの操作が社会にどのような影響を与えるのかを考察することは、男性性を扱う人類学的研究における課題となりえる。

本論で扱う「ダンスホール・ゴスペル」の事例においても、「ゴスペル DeeJay」たちが構築する男性イメージとそれをとりまく動きは、ジャマイカ社会における男性イメージの操作の動きのひとつとして捉えることができる。

ただし、これは主に教会コミュニティ内部での動きであり、「ゴスペル DeeJay」が体现する男性イメージも、「キリスト教徒」男性としてのイメージである。この男性イメージを、教会コミュニティを超えてジャマイカ社会全体に影響があるものとして捉えることは過度の一般化だという批判があるかもしれない。しかしジャマイカがキリスト教国であり、それゆえ上記のような男性を対象とした研究や運動の基底にあるのもキリスト教の倫理規範であるということや、「ダンスホール・ゴスペル」が教会コミュニティの外部に向けてもパフォーマンスされ、それが受容・利用されていることを考えれば、「ゴスペル DeeJay」が体现する男性イメージがジャマイカ社会全体に対して持つ影響力も無視できない。こうした側面については本論の後半部でより詳しく検討したい。

本論の主な目的は、「ゴスペル DeeJay」が構築し体现する男性イメージと、それが教会コミュニティ、さらにはジャマイカ社会に与える影響を考察することである。この具体的事

例の考察を通して、男性イメージの操作が社会に与える影響を人類学的に考察するための概念枠組みの検討を試みたい。

まず1章では、「ダンスホール・ゴスペル」が生起している背景を説明する。ここではジャマイカにおけるキリスト教の概説、非「キリスト教徒」男性が「キリスト教徒」男性に対して抱くステレオタイプのイメージについての説明、ダンスホールの概説、ダンスホールの主役である Deejay がもつ男性イメージの説明を行う。2章では「ダンスホール・ゴスペル」について概説し、その後で二人の「ゴスペル Deejay」のパフォーマンスを取り上げ、彼らのパフォーマンスを通して構築されている男性イメージを論じる。3章では、「ゴスペル Deejay」が体现する男性イメージが教会コミュニティ内でどのような影響を及ぼしているのかを論じる。最後の「考察と展望」では、「ゴスペル Deejay」が体现する男性イメージがジャマイカ社会全体に持ちうる影響について論じうえて、本論で扱った事例をもとにして、男性イメージの操作が社会に与える影響を考察するための概念枠組みの構築にむけた考察を行う。

1. 「キリスト教徒」男性のイメージと Deejay のイメージ

「ゴスペル Deejay」の男性イメージがどのように新しく、それがどのような社会的影響力を持つのかを論じるためには、まず彼らの文化的・社会的背景を説明しておかなければいけない。それはすなわち、ジャマイカのキリスト教と、ダンスホールである。とりわけ「キリスト教徒」の男性イメージと、ダンスホールの主役である Deejay の男性イメージは、次章で論じる「ゴスペル Deejay」の男性イメージと直接的な関係を持っている。本章では、ジャマイカのキリスト教、「キリスト教徒」の男性イメージ、ダンスホール、Deejay の男性イメージ、の順に論述していく。

1-1 ジャマイカのキリスト教

表1は2001年の国勢調査をもとに作表された、「ジャマイカにおける各宗教・教派への『所属』人口」である。この表からは、ジャマイカにおけるキリスト教諸教派およびキリスト教以外の宗教のおおよその勢力を読み取ることができる。ただし初めに注釈を加えておかなければいけないのは、この表に表されているのはあくまで彼らの宗教的な「所属 (affiliation)」意識であって、それは必ずしも彼らの宗教的なアイデンティティと同じではないということである。しかもその「所属」という語の意味は質問紙では説明されておらず、回答者は曖昧な基準で、自分に何らかの関係がある教派を選択回答したものと思われる。この点については後述する。

先に、表1からジャマイカの宗教情勢を読み取ってみよう。この表では、キリスト教教派に「所属」している者がジャマイカの人口全体の約65%に達している。加えて、「Other Religion / Denomination」を選択した者の多くも、回答用紙に選択項目として名前が挙げられ

なかった教派や無教派の教会に通う人々であると推測されるので、それを加えると最大で約75%の人々が何らかのキリスト教の教派に「所属」していることになる。

キリスト教の教派のうち、最大勢力はペンテコステ派である。選択項目としてあげられている教派名のうち、ペンテコステ派として考えられるものをまとめると、その「所属」人数は約33%になる。それに続く勢力はセブンス・デー・アドベンティストで、約11%。次がバプティストで約7%である。これらはいずれも回心を重んじ、伝道活動を積極的に行う教派である⁶⁾。

表1 ジャマイカにおける各宗教・教派への「所属」人口

Religious Affiliation / Denomination	Total Population	% of Total	Male	Female
Jamaica (全体人口)	2,595,962	100	1,275,670	1,320,292
ペンテコステ派				
Pentecostal	247,452	9.53	105,637	141,815
Church of God in Jamaica	124,184	4.78	52,320	71,864
Church of God of Prophecy	113,225	4.36	49,734	63,492
New Testament Church of God	163,912	6.31	71,158	92,754
Other Church of God	215,837	8.31	93,310	122,527
その他のキリスト教諸教派				
Anglican	93,612	3.61	42,693	50,919
Baptist	188,770	7.27	84,460	104,310
Brethren	24,217	0.93	10,626	13,591
Jehovah's Witness	44,203	1.7	18,411	25,792
Methodist	50,024	1.93	22,248	27,776
Moravian	20,975	0.81	9,746	11,228
Roman Catholic	67,204	2.59	31,248	35,956
Seventh Day Adventist	281,353	10.84	127,318	154,035
United Church	64,154	2.47	28,165	35,988
キリスト教以外の宗教				
Rastafarian	24,020	0.93	20,610	3,410
Baha'i	279	0.01	146	133
Hinduism	1,453	0.06	825	628
Islam	1,024	0.04	676	348
Judaism	357	0.01	193	165
Other Religion Denomination	253,652	9.77	110,892	142,761
No Religion / Denomination	543,902	20.95	357,637	186,265
Not Reported	72,151	2.78	37,617	34,534

出典：ジャマイカ統計研究所による2001年国勢調査 (*Jamaica Population Census 2001*) より。
ただし、教派・宗教のグループ分けは著者による。

さて、ジャマイカにおいてキリスト教徒としてのアイデンティティは、この表に表れているような曖昧な「所属」意識とは異なるものだ、と先述した。この表では、ジャマイカの全人口のおよそ 65~75%がキリスト教の教派に「所属」していることになるが、日常的な場面では、自分をキリスト教徒として名乗ることができる人は、これほど多くはない。本論では、日常的な場面で自分をキリスト教徒として名乗ることができる人を、キリスト教徒としてのアイデンティティを持つ人として考え、「キリスト教徒」と表記して考察の対象とする。

一般的にジャマイカでは、「キリスト教徒」として自己認識・表明するためには、信心を持っているだけではなく、「キリスト教徒」としてあるべき生活をしていなければいけない。これは、上記のように回心を重んじる教派がこの地で優勢であることに起因する要件であると思われる。では、「キリスト教徒」としてあるべき生活とはどのようなものなのだろうか。しばしば「キリスト教徒とはキリストのように (*Christ-like*) なろうとする者のことだ」などと言われ、聖書の中で描かれているキリストの行動や教えが模すべきものとして語られることもある。しかし「キリスト教徒」としてあるべき生活をより具体的に規定するのは、「罪」を同定する道徳倫理である。

ジャマイカの「キリスト教徒」が「罪」として考えるものは多岐にわたるが、そのなかでも特に強調されるのは「婚前性交渉 (*fornication*)」「婚外性交渉 (*adultery*)」をはじめとする性的な「罪」である。

ジャマイカでは新生児の 80%以上が婚外子として生まれてきている⁷⁾。その背景には、「訪問夫婦 (*visiting union*)」「慣習法婚 (*common-law union*)」と呼ばれる、法的な結婚を伴わない異性関係の慣習がある。これらの関係にある男女が子供をつくるのが婚外子の多さの原因となっているのである⁸⁾。またジャマイカの全世帯のうちの 39.7%で女性が世帯主となっている⁹⁾。この背景には「母親中心家族 (*matrifocal family*)」¹⁰⁾と呼ばれる、未婚の母親や祖母が世帯形成の中心となる形態がある。

「婚前性交渉」「婚外性交渉」「訪問夫婦」「慣習法婚」といった異性関係をもつ人はたとえ信心を持っていたとしても、日常的な場面で自らを「キリスト教徒」として名乗らない傾向が強い。反対に「キリスト教徒」を自認する人は、これらの異性関係が「罪」とであると強調し、自らはそれを避けることにより、「この世 (*world*)」に生きる人々から差異化するかたちで「キリスト教徒」アイデンティティを明確にすることができるのである。

この他に、ジャマイカのキリスト教の道徳倫理では、飲酒、喫煙、ギャンブルなども「罪」として禁忌される。「この世」に生きる人たちが普通に行うこれらを禁忌することも、「キリスト教徒」のアイデンティティ形成を助けている。その他にも「罪」とされるものの中には盗み、殺し、嘘言などがあるが、これらは社会全体に共有されたものであるため、「キリスト教徒」のアイデンティティ形成にさほど重要な影響をもたないと考えられる。また、年配の人や保守的な教会の人からは、肌を露出しない服装、清潔で簡素な身なり、丁寧な言葉遣い、従順さなども「キリスト教徒」に求められる道徳倫理として語られることも多

いが、若者を中心にその根拠を疑問視する声もある。いずれにせよジャマイカでは、「キリスト教徒」アイデンティティはこれらの道徳倫理、中でも特に性にまつわる道徳倫理に基づいた生活を送ることによって得られるものである。

1-2 「キリスト教徒」男性のイメージ

ここでは、「キリスト教徒」男性が、主に非「キリスト教徒」男性に対して与えるイメージについて論述する。表 1 を見ると、各キリスト教の教派への「所属」人数はおしなべて男性のほうが女性よりも 1 割から 4 割程度少ない。その一方で「No Religion / Denomination」を選択した男性回答者数が女性回答者数の約 2 倍にのぼっている。つまり、男性のほうが女性よりも教会から距離を置いているということである。実際に日曜日の教会の礼拝へ集まっている会衆を見ると、男性の姿は全体の約 4 分の 1 といったところであり、実際に教会の活動に積極的に参加している男性の数は表 1 から受ける印象よりもさらに少ないといえる。

ただし、ジャマイカにはキリスト教的な世界観が深く根付いており、いわゆる「無神論者 (atheist)」は非常に少ない。日ごろ教会の活動に参加しない人々の多くも、聖書の創世記に書かれているように神がこの世を創造していることを信じており、苦難の時には神に祈ったり、教会に行ったりする。表 1 で「No Religion / Denomination」を選択した男性回答者の多くも、信心を持っていないというわけではなく、ただ教会に関与しておらず、「所属」意識がないというだけだと推察できる。

男性が教会と距離を置く理由として、ジャマイカではしばしば、男性は日曜日にも働かないといけないから、という理由や、男性はサッカーなどの他の活動で日曜日の時間を使うから、などの理由が述べられることもあるが、実際には日曜日に働く男性は一部のみであるし、他の活動も日曜日の午前の数時間の間にしなければいけないわけではない。むしろ、男性が教会に来ないのは彼らが「キリスト教徒」男性のイメージを敬遠しているからだと考えられる。

ジャマイカの男性たちの間では、「キリスト教徒」の男性に対して軽蔑を含んだステレオタイプ的な見方がされていることが多い。ジャマイカのペンテコステ派についてジェンダー的な視点から調査研究を行ったオースティン＝ブルースによると、回心してペンテコステ派の「キリスト教徒」になる男性は「男らしさ」を表現する方法となる（婚姻関係外での）性的関係、ギャンブル、飲酒、喫煙などを「罪深いもの」として放棄しなければいけないため、アイデンティティに難題を受けるのだという [Austin-Brooks 1997:123]。これはペンテコステ派だけではなく、厳格さで劣るものの同様に回心を重視する他のプロテスタント系の教会に通う男性たち全般に言えることだろう。

またあるプロテスタント系教会 (Holiness Christian Church) の牧師の論文によると、教会での活動が感情の表出を伴う「ソフト」で「女っぽい」もの、学校でのようにじっと座って話を聞いていなければいけない「子供っぽい」ものとして男性たちによって見なされ

がちであるということも、教会へ通う男性たちの評価を低くしている [Vassel 1997:24, 30-31]。著者のフィールドワークにおいても、回心して「キリスト教徒」になったときに周囲の男性たちから嘲笑されたという語りはしばしば聞かれた。

このように、「キリスト教徒」男性は、「男らしさ」を欠く存在としてステレオタイプのイメージされている。ただし教会コミュニティを率いる牧師に対しては、これとはまた別のステレオタイプのイメージ化がなされている。

西インド諸島大学の人類学者であるシェバンズは、ジャマイカの賭け事、「ドロップ・パン(Drop Pan)」で使われる数字がもつシンボリズムの研究において、「牧師」と「男らしさ」、「祭壇」と「男性器」が同じ数字で表されていることを指摘し、民衆の間では牧師が性的な力と宗教的な力をあわせ持った存在として想像されているという説明を加えている。彼によると、ほとんどが女性からなる教会の会衆のリーダーである牧師は、「雌鶏の群れを率いる雄鶏」に譬えられる。この動物への譬えに暗示されているように、「ジャマイカの宗教生活には、聖職者とその会衆の女性成員との間での禁じられた性的関係のうわさや非難があふれている」[Chevaness 1989:47-48]。

確かにジャマイカの大衆紙を見ても、聖職者の性的スキャンダルが頻繁に取り上げられている。このようなスキャンダル報道は、人々の牧師に対する疑惑と非難のまなざしを反映しており、同時にそれを強化している。ドロップ・パンにおいて「牧師」と「男らしさ」が同じ数字に同居していることにも表れているように、女性教会員たちを率いる地位にある牧師は、このような疑惑や批判のまなざしを受けながらも、「男らしい」存在としてイメージされるのである。

また、オースティン＝ブルースによると、牧師は女性教会員たちからもしばしば性的な魅力を持つ男性としてまなざされており [Austin-Brooks 1997:154-57]、さらには回心してそれまでの男らしさの表現方法を放棄しなければならないペンテコステ派の男性たちも、教会内でのリーダー的ポジションに就くことによって、男らしさを確保しようとするのだという [Austin-Brooks 1997:123]。

このように、一般的な「キリスト教徒」男性が「男らしさ」を欠く存在として軽侮されるのとは対照的に、牧師をはじめとするリーダー的なポジションにある「キリスト教徒」男性は、疑惑や非難の対象となりながらも、「男らしい」と見なされるというアンビバレントなイメージを持っている。

1-3 ダンスホール

ジャマイカでは、「ダンスホール (danehall)」という語は二つの意味を持っている。音楽ジャンルとしてのダンスホールという意味と、ダンスのために野外に創出される空間としてのダンスホールという意味である。本論では便宜的にこれらを「ダンスホール音楽」「ダンスホール空間」と呼び分け、それぞれについて説明する。

ジャマイカのポピュラー音楽は、1950 年代後半のスカ (Ska) から、1960 年代後半には

ロック・ステディ (Rock Steady)、レゲエ (Reggae) へ、そして 1980 年代にはダンスホール音楽へ、という形で流行の形態を作り出してきた。ダンスホール音楽の音楽的特徴としては、「リディム (Riddim)」と呼ばれるデジタル録音されたリズム・トラックに載せて Deejay (ディー・ジェイ)¹¹⁾と呼ばれる歌い手が歌うということが挙げられる。

Deejay の歌唱法は、アメリカのヒップ・ホップにおけるラッパーの歌唱法に似ている。しかし Deejay の歌唱法は英語ではなく、パトワ語 (Patois) と呼ばれるジャマイカのクレオール言語で歌われる。パトワ語は西アフリカの声調言語の特徴を引き継いでおり、音の高低でアクセントをつける。そのため Deejay の歌唱法も、ラップとは違い、音程があり、単調ではあるがメロディを持っている。

歌詞の面では「スラックネス (slackness)」と呼ばれる性的な内容を露骨に歌うものや、「ガン・トーク (gun talk)」と呼ばれる、銃を使ったギャング抗争を描写したり、銃を比喩的に使って自分の (能) 力を表現するものが多く、このような表現はスカやレゲエに親しんできた年配の人々や、「キリスト教徒」たちからの批判的となっている。

ダンスのために野外に創出されるダンスホール空間は、「セッション (session)」、あるいは単に「ダンス」「パーティ」とも呼ばれる¹²⁾。ダンスホール空間は、「サウンド・システム (sound system)」と呼ばれる巨大なスピーカー・セットを含む音響設備を路上や広場に設置することで作り出される。

首都キングストンでは、毎晩あちこちに大小のダンスホール空間が出現する。ダンスホール空間では次々と流行のダンスが誕生するが、その中には *Dutty Wine* (Dutty=下品な、汚い。Wine=腰をくねらす動き)、*Hot a Wuk* (Wuk= Work。性交の隠語)、*Daggarin'* (突き刺すこと。激しい性交の隠語) など性的な含意を持つものも多い。着飾って集まる若者たちの中には奇抜なファッションの者も少なくない。特に女性は肌の露出度の高い服を着た人が多い。また、アルコール類やタバコの販売はもちろん、マリファナの販売や吸引も半ば公然と行われていることが多い。上で述べたような歌詞だけでなく、ダンスホール空間に見られるこのような行いも、「キリスト教徒」からの批判の対象となっている。

ダンスホール音楽とダンスホール空間は、相互に結びついている。多くのダンスホール空間で「サウンド・システム」が流す音楽はダンスホール音楽であり、一方 Deejay やプロデューサーたちもダンスホール空間を意識した曲作りを行っている。

ダンスホールは、ジャマイカにおける主要な娯楽である。大衆紙でも人気 Deejay たちの動向を扱った記事が大きな割合を占め、人々のダンスホールに対する関心の高さをうかがわせる。特に貧困層の人々にとっては、普通は入場料を取らないダンスホール空間や、ラジオやテレビで放送され、バスやタクシーの中でかけられ、CD-R にコピーされて路上で安価で売りさばかれるダンスホール音楽は、最も身近で金がかからない娯楽となっている。

このようにダンスホールは人々の関心を集め、人々の生活とも深く関わっているため、社会的影響力が強いものとして現地では考えられている。新聞紙上でも、ダンスホールの批判者と擁護者の間での議論がときおり交わされる。

すでに触れたように、「キリスト教徒」は頻繁にダンスホールを批判する。それは、ここまで見たように、「キリスト教徒」が「罪」として見なすような要素をダンスホールが多分に持っているからである。教会における語りのなかでもダンスホールはしばしば「罪」や「この世のこと (world)」を象徴するもののように用いられる。ペンテコステ派などの「悪魔払い」を行う教会では、ダンスホールを「悪魔が支配する空間」とする表現すら聞かれる。

1-4 Deejay の男性イメージ

ダンスホールの主役である Deejay たちの男性イメージはジャマイカ社会においてどのようなものなのだろうか。第一線で活躍する Deejay の多くは貧困層出身である。裸一貫から自分の能力を頼りに成功を手に入れた Deejay の姿は、貧困層の若者たちに夢を与えるものである。それゆえ Deejay を志す若者の数は多い。キングストン市内には、大小の音楽スタジオが無数に存在し、既製の「リディム」を使って簡単に自曲をレコーディングすることができる。その激しい競争のなかで成功を手に入れるものはわずかであり、それゆえ Deejay は技術を磨くこともさることながら、自分のスタイルを他から差別化することに余念がない。よって彼らが体現する男性イメージも、極言すれば多種多様なのだが、その中でも無法者 (outlaw) 的な存在に同一化した男性イメージは Deejay によって体現される最も代表的なものとしてダンスホール研究の中で扱われている。

ダンスホールについての人類学的研究を行ったストルゾフによれば、ジャマイカ人には国家権力に挑戦する無法者(outlaw)を好む傾向が昔からあるが、現在ではギャングスタたち (gangsters) が、犯罪行為も行う一方で、このような英雄的な役割を果たしているという [Stolzoff 2000: 10]。Deejay たちはその歌の中でギャングスタの生活をroman化し、またそのパフォーマンスや日常生活を通してギャングスタ的な役柄を演出しているという [Stolzoff 2000:11]。

ダンスホールをテキスト研究的な手法で研究するクーパーも、Deejay が体現するイメージについてストルゾフとほぼ同じ分析を行っている。ジャマイカでは、いわゆる悪漢的人物を指して、「バッドマン (badman)」という言葉が使われるが、Deejay の多くも「ガン・トーク」やステージ・パフォーマンスを通して自分を「バッドマン」として演出する。クーパーはそのような性向を「バッドマニズム (badmanism)」と呼ぶ。

クーパーはその「バッドマニズム」の起源のひとつをハリウッド映画に見出している。彼女によると「バッドマニズム」とは、「輸入映画のヒーローや悪党の服装面とイデオロギー面での『スタイル』を、ジャマイカの若者たちが模倣し適合させることを学び、複雑な社会化の過程の中で精練した演劇的提示 (theatrical pose) である[Cooper 2004:146-47]」。彼女はさらに、ストルゾフと同じようにジャマイカの歴史の中にもその起源を見出している。「バッドマニズム」には、「隷属させるための鞭打ちに屈することを拒否したアフリカ系奴隷の人々の反逆的エネルギーに起源を持つ、英雄的な「バッドネス」の土着的伝統も存在

する[Cooper 2004: 147] 』という。

カルチュラル・スタディーズ的な手法でダンスホールを研究するホープは、「パッドマン DeeJay」が表現する「シャッタ (shotta)」¹³⁾のイメージに注目しているが、これも上記の「ギャングスタ」や「パッドマン」のイメージとほぼ同じものだといえる。ホープによると、1998 年前後から広く使われるようになった「シャッタ」という語が表象するのは力、攻撃性、強さを持つ個人のイメージであり、さらに彼が持つ統は男性のシンボルであり、「硬く、ファロスのな力ー象徴的で永久に直立しているペニス」のイメージを宿している [Hope 2006: 96]。この「シャッタ」のイメージは、ダンスホールを超えて称賛されており、子供たちの間でも、男女を問わず、「シャッタ」という形容が地位と称賛を表すものとして好んで使われているという [Hope 2006:97]。

本論では、これらの研究者たちが注目する「ギャングスタ」「パッドマン」「シャッタ」のイメージを体現する傾向を「パッドマニズム」として括り、DeeJay たちの典型的な男性イメージとして捉えたい。この「パッドマニズム」的な男性イメージを体現する DeeJay たちは、「キリスト教徒」からの批判の対象となっており、牧師の説教の中で名指しで批判されることもあるような存在である。

ここまで、ジャマイカのキリスト教とダンスホールを概観し、「キリスト教徒」男性と DeeJay という対照的な二つの男性イメージがあることを述べてきた。一般的に「キリスト教徒」男性は「男らしさ」を欠く存在として男性たちの中で軽侮され、反対に DeeJay が体現する「パッドマニズム」的な男性イメージは男性たちの中で称賛されるものであった。では、「キリスト教徒」男性でありながら DeeJay でもあり、対照的なイメージが重なりあうはずの「ゴスペル DeeJay」は、どのような男性イメージを持っているのだろうか。次章ではまず「ダンスホール・ゴスペル」について概説し、その後で二人の「ゴスペル DeeJay」のパフォーマンスを例として、そこに見られる男性イメージについて考察する。

2 「ゴスペル DeeJay」のパフォーマンスにみられる男性イメージ

2-1 「ダンスホール・ゴスペル」

前章でふれたように、ダンスホールは「キリスト教徒」からの批判的になっている。それにもかかわらず、そのダンスホールの音楽的要素を用いてキリスト教的なメッセージを伝達しようとするのが「ダンスホール・ゴスペル」である。ここでいうダンスホールの音楽的要素とは、「リディム」と呼ばれるリズム・トラックの使用、DeeJay の歌唱法、そして後にみるようなステージ上でのパフォーマンスのしかたなどを指している。その音楽的要素を使って伝達されるキリスト教的なメッセージの内容は多岐にわたる。大別すれば、「この世」の腐敗・墮落・罪を批判するもの、「悪魔」との戦いや「神」との関係を表現するもの、「キリスト教徒」たちを鼓舞するものなどがある。従来のゴスペル音楽と違い、歌と語りとの中間的な表現形式で言葉数が多い DeeJay の歌唱法が、具体的な状況の描写や、

時事的な話題を歌詞に盛り込むことを可能にしているのが特徴的である。また従来のゴスペル音楽の多くが英語で歌われるのに対し、Deejay の歌唱法には日常生活で話されるパトワ語が使われるため、その表現もよりローカルな現実味を帯びている。

1990 年代後半に、当時最も人気のある Deejay であったスティッチー（Stichie）とパパ・サン（Papa San）が回心して「キリスト教徒」となり、「ゴスペル Deejay」として活動を再始動したことが「ダンスホール・ゴスペル」のはじまりだった。それ以前にも教会の催しで Deejay をする「キリスト教徒」男性はいたようだが、「ダンスホール・ゴスペル」が一つの音楽的な立場として認知され、また商業化されるようになったのはやはりこの二人の有名 Deejay が「ゴスペル Deejay」になったことによるところが大きい¹⁴⁾。

「ゴスペル Deejay」として活動する者の総数を把握することは難しい。これはジャマイカのポピュラー音楽界では、プロフェッショナルとアマチュアの境界があいまいであるためである。キングストン市内の CD 販売店に流通するアルバム CD を作成している一部の成功した「ゴスペル Deejay」の基本情報を表 2 にまとめている。「ゴスペル Deejay」たちの多くは、かつてギャング活動、薬物摂取、性関係などに手を染めており、彼らはその経験について歌や語りの中で積極的に言及している。

世俗の Deejay のほとんどは男性であるが、「ゴスペル Deejay」もほぼ全員が男性である。これは教会の聖歌隊のメンバーが女性を中心に構成されているのとは対照的である。彼らの多くはペンテコステ派教会、あるいはペンテコステ派の影響を受けたカリスマ派教会¹⁵⁾に通っている。その理由としては、これらの教会が伝道活動を積極的にやっており、その伝道活動を機として「救われた」「ゴスペル Deejay」たちがそのままその教会に通っているということ、およびこれらの教会は礼拝や伝道活動などで音楽を積極的に用い、またポピュラー音楽の要素を教会に取り込むことにも比較的寛容なので、「ゴスペル Deejay」たちにもパフォーマンスの機会が与えられやすいということが挙げられる。

「ダンスホール・ゴスペル」のファン層は、ペンテコステ派、カリスマ派に限らず、幅広く存在する。年齢層としては、やはり 10 代、20 代の若い「キリスト教徒」たちにファンが多い。一方、年配の「キリスト教徒」の中には、「ゴスペル Deejay」たちのパフォーマンスに見られる攻撃性・横暴さを批判する人や、彼らが実生活で起こしたいくつかのスキャンダルを取り上げてその素行の悪さを批判する人もいる。

「ゴスペル Deejay」たちの活動の場は主に教会やキリスト教団が行う伝道集会や催しであり、「世俗の」ダンスホールやコンサートでパフォーマンスすることは稀である。メディアへの露出は、キリスト教系のテレビ局やラジオ局、あるいは早朝や週末の各局のゴスペル番組にほぼ限られているが、普通の Deejay たちとの人数の比率を考えれば、特権的なメディア露出の機会が与えられているといえる。

表 2 「ゴスペル Deejay」の基本情報（アルバム CD を発売している者のみ）

アーティスト名	性別	生年	回心した年	回心前の音楽キャリア	アルバムCD枚数	通っている教会
Papa San	男	1962	1997	あり	3*	バプテスト派の教会で洗礼を受けた後、Church on the Rock (Ch)へ移動。 1980年代に最も活躍したDeejayの一人。弟が警察により射殺されたことがきっかけで、信仰の探求をはじめた。現在は合衆国に居住。
Stitchie	男	1966	1997	あり	3*	Covenant City Church (Ch) 1980年代に最も活躍したDeejayの一人。交通事故で奇跡的に助かったことが回心の契機。
Goddy Goddy	男	1970	1999	あり	3	Cavaliers New Testament Church of God (P)で「救われ」た。 回心前はSnake Manという名でDeejayをしていた。回心まではギャング団のリーダーでもあった。現在は牧師としても活動している。
DJ Nicholas	男	1980	2000	あり	2	New Life Assembly of God (P) 回心前はNamelessという名でDeejay活動をしていた。熱烈なラスタファリアンであったが聖書の使徒行伝4章12節を読んで回心した。
Prodigal Son	男	1976	1998	なし	3	Church on the Rock (Ch) 回心前は貧困地域のギャングの一員で銃も所持していた。Church on the Rock 教会の伝道活動を通じて回心した。
Ryan Mark	男	1985	1999	なし	2	New Life Assembly of God (P) Goddy Goddyの弟。意中の女性に会うために教会に通ううちに神に「引き込まれた」。回心後にDeejayの活動を始めた。
Jason Mighty	男	1980	2000	なし	1	New Life Assembly of God (P) Prodigal Sonの弟。回心した「バッドマン」による伝道をうけ、感化されて自分も回心したという。
Mr. Gallimore	男	1980	1997	なし	1	Church on the Rock (Ch) Church on the Rockの伝道活動によって回心した。回心後にMosesとともに「KGs」というデュオを組んでDeejay活動を始めた。
Moses	男	1980	1997	なし	1	Church on the Rock (Ch) Church on the Rockの伝道活動によって回心した。それ以前はギャングの一員であった。抗争による自身の溺死体験と友人の死が回心の契機。
Shepherd	男	1966	1991	あり	1	Church of Christ 薬物中毒、収監などによる絶望感の中で神に祈り、回心に至った。
Craig C	男	1986	-	なし	1	United Church 14歳からDeejayをはじめた。ゴスペルDeejayとしてはめずらしく大学卒。2004年ごろから大型コンサートにも出演し、有名になっている。

註1: これらの情報は、著者によるインタビュー、新聞記事、ウェブサイトを通して得られたものである。

註2: (P)はペンテコステ派を、(Ch)はカリスマ派を表す。

註3: *のCDアルバムCD枚数は、回心後に「ゴスペルDeejay」として発表されたもののみを算入している。

「ゴスペル Deejay」が体现する男性イメージは、彼らの歌詞やプロモーション・ビデオを通して考察することもできるが、ここでは観衆との相互作用が見えやすいステージ・パフォーマンスを通して、彼らの男性イメージの考察を行う。ここで取り上げるのは、ガディ・ガディ (Goddy Goddy) とプロディガル・サン (Prodigal Son) という現在のジャマイカで最も人気がある二人の「ゴスペル Deejay」のステージ・パフォーマンスである。

2-2 ガディ・ガディのパフォーマンス

著者は2007年8月に、キングストン市内のホテルのロビーにて、ガディ・ガディにインタビューを行っている。ここではまず、そのインタビューによって得られた情報を中心に、フィールドワークで得られた情報、新聞記事およびインターネットを通して得られた情報も用い、彼について記述する。そのうえで彼のパフォーマンスを記述・分析する。

ガディ・ガディは私が現地調査をしていた2008年から2009年にかけて、ジャマイカで一二を争う人気の「ゴスペル Deejay」であった。この時期の彼は、伝統的な賛美歌をダンスホール風にリメイクした「Chaka Chi」という曲を大ヒットさせており、大手家具店のCMに起用されたり、人気テレビ番組にゲスト・アーティストとして出演するなど、ゴスペル・アーティストとしては異例の活躍をしていた。

その風貌は、決してハンサムとはいえない。多少ふくよかな体系をした大柄な男性である。下膨れの顔をしているうえに、口を開けると歯並びも悪い。常にサングラスをかけ、ポーカーフェイスでクールさを演出しているが、それでも顔全体の不細工さを隠しきれていないところがコミカルな印象も与える。彼自身もステージの上で、「俺があんまり醜いから、みんなは『神様が残りのものでこいつを作ったにちがいない』って言ったものさ」と笑いのネタにすることもある。

彼は現在までに3枚のアルバムCDを発行している。アルバムCDのジャケットではそれぞれ迷彩柄の軍服、カウボーイ風の上下スーツ、牧師風の詰襟シャツなど、コスチューム的な服装に身を包んでいるが、小さなステージや伝道集会に現れるときには、シャツにジーンズというラフな出で立ちが多い。いつも十字架のネックレスをつけ、プレスレットをはめている。

彼のDeejayスタイルは歯切れのよい早口であり、他の「ゴスペルDeejay」と比べても技術の高さを感じさせる。加えてステージ上の彼は卓越したコメディアンでもある。伝道集会などでは、歌よりも話のほうの方が長いこともあるほど。巧みに声色を変え、ふんだんにジェスチャーを使い、観衆を大いに笑わせる。

彼は1971年生まれ。彼によると、良い両親のもとに育ち、小さい頃には教会に通っていたという。彼の弟で同じく「ゴスペルDeejay」のライアン・マーク(Ryan Mark)によると、その家族は「豊かでも貧しくもない、平均的な家族。5人兄弟がいて、全員同じ両親からの子供。」だったとのこと。父親はよく大きなサウンド・システムを呼び、地域でダンスホールを開いていたという。

ガディ・ガディは13歳のときに早くもDeejayとして有名プロデューサー「スライ・アンド・ロビー(Sly and Robbie)」のもとで初レコーディングを体験したという。高校を卒業し、電気技師として2年間働いた後、仕事を辞めて本格的にDeejay活動に専念するようになった。当時の彼はスネーク・マン(Snake Man)という芸名を使い、トップ・クラスのDeejayたちに混じって活動していたが、ヒット曲には恵まれなかった。同時に彼は、キングストン内にあるカッサバ・ピース(Cassava Piece)という貧困地域で「墓場団(Grave Yard Crew)」というギャングのリーダーとなっていた。上述の弟によると、それは悪い友人たちの影響を受けた結果だという。

彼は1999年に回心している。そのきっかけは、同じギャングの仲間たちが次々と撃たれて死んでいく¹⁶⁾のを見るにつけ、次は自分の番なのではないか、自分が死んだら自分の魂は地獄へ行くのではないかと恐れるようになったことにあるという。さらに彼自身のウェブサイト上のプロフィールによると、2008年には正式に牧師(pastor)として叙任されている。

ここでは、2009年3月に行われた、ジャマイカ最大規模のゴスペル・コンサート「ファン・イン・ザ・サン(Fun in the Son)」¹⁷⁾でのガディ・ガディのパフォーマンスの様子を考察する。この日の彼の出番は最後から2番目であった。模様の入った白い三つ揃えのスーツを着ている。彼はこの日、数曲をパフォーマンスしたが、以下はそのうち「罪のなさ(Sinless)」をパフォーマンスしている際の様子である。

ガディ・ガディはステージの前方に立ち、片手にはマイクを、もう片方の手には白いハンカチを握り締めている。はじめガディ・ガディは、少し身をかがめ、声のトーンを下げて歌っている。バンドも彼に合わせて音量を落として静かに演奏している。

「罪は政治家たちに子猫（puss）のように盗ませる。そして自分の国を貶しあい（cuss-cuss）みたいに安く売り渡すんだ。」

ここでガディ・ガディは急にぐっと背すじを伸ばし、叫ぶようにして歌い始める。「罪は女の子たちにここから上を（right ya so come up）白くさせる！」このときガディ・ガディはハンカチを持ったほうの手で腰のあたりから頭までを指差している。次に彼は自分の足元を指差しながら叫ぶ。「で、この下はブレッド・フルーツ¹⁸⁾が焦げあがったみたいに黒いんだよ！」¹⁹⁾

注意深く聞いていた観衆からは大きな反応が返される。歓声があがり、多くの人が飛び跳ねている。手に持ったタオルや国旗を頭上で振る人も多い。ガディ・ガディはそのままコーラス部分を歌う。

コーラス部分が終わると、くるっと振り返り、バンドに向かって、「音量（level）！音量！」と指示を出し、音量を再び下げさせる。そして再び観客のほうに向いたガディ・ガディは、「聞けよ。ちょっと待って。二人の男が一緒に寝るべきじゃないと思う人は全員、こうやって手を挙げて。」と、自ら片手を挙げてみせながら観客に呼びかける。

多くの人はそれに応えて手を掲げながら歓声を上げる。口笛を鳴らす者もいる。興奮気味の観衆に向かい、ガディ・ガディは「そう思うかい？ようし。言わせてもらおうぞ？ガディ・ガディを見ている。俺をよく見てろよ。」と言う。そしていったんバンドのほうに振り向き「ゆっくり。」と指示を出し、再び観客に向かい、「聞けよ。シッ。」と言う。そして次の歌詞を歌い始める。

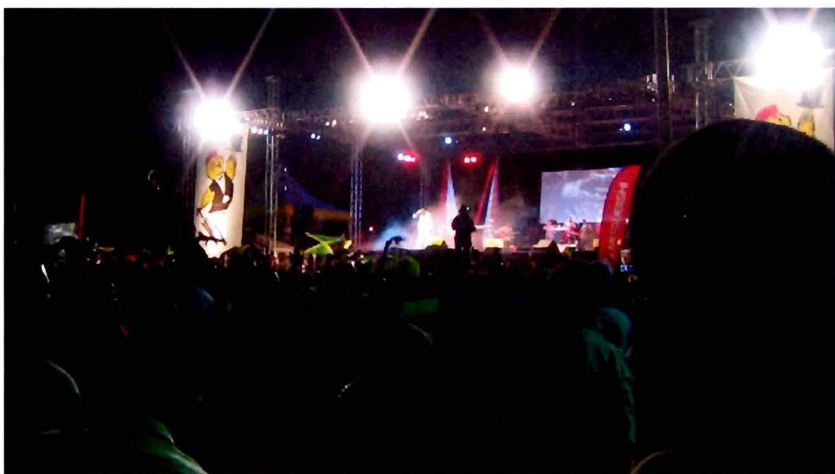
「罪は男たちに耳や鼻（nose）に穴を開けさせる。女の子の服を着てセクシーなポーズ（pose）を決めさせる。」歌いながら彼は女性がよくするように腰に手を当てるポーズをとってみせる。これには観客が爆発的な反応を示す。みな歓喜の表情で、飛び跳ねる、腹を抱える、腕を振り上げるなどの動きを見せる。この反応を見たガディ・ガディは一度歌うのを中断し、バンドのほうに歩み寄り、「ゆっくり演奏しろって言っているだろ！」と声をかける。

その間、観客はまだ大笑いしている。女性たちが「ヒーヒッヒ！」「ヒャー！」と高く笑う声が響く。若い男性たちが手の指をピストルの形にし、頭上に掲げているのがいくつも見える。「パッ、パッ、パッ！」「ブヤカ！ブヤカ！」など銃声を模した声があがる²⁰⁾。

再びステージ前方に戻ってきたガディ・ガディは、「俺だけがこんなにアティチュード²¹⁾を持っているゴスペル・アーティストだぜ。誰か言ってくれよ、『アティチュード！』」すると観客から「アティチュード！」と声が返される。これを受けてガディ・ガディは、「もう一度準備はいいかい？ガディ・ガディを見ろよ。俺を見ろ。シッ！」という、冒頭からもう一度歌い始める。

観客は彼の言葉を注意深く聞き取ろうとしている。先ほどと同じ箇所にさしかかる

と、また歓声を上げかけるが、ガディ・ガディがさらに歌うのをみて、興奮を抑えるようにして再び耳を傾ける。「罪は男たちにジャネットやパムを捨てさせる。マキシンもシェロンもだ。そしてチチ・マン (Chi chi man) ²²⁾に変えてしまう。」ここでガディ・ガディは飛びのくように 2, 3 歩下がり、モデルが歩くときのように足を交差させて歩いてみせながら次のように歌う。「罪は女の子たちにマッチ(matches)みたいにホットだと思わせる！そしてハゲタカが熱い灰 (ashes) の上を歩くみたいなステップをさせるのさ！」これには、観客もこれまでよりも一層大きな反応を示す。



(写真 1,2) *Fun in the Son* でのガディ・ガディのパフォーマンスの様子。2009 年 3 月 21 日 (土曜日)。筆者撮影。

このパフォーマンスの様子からは、ガディ・ガディが DeeJay の典型的なパフォーマンス技法をキリスト教の道德倫理に反さないものへと慎重に組み替えている様子を読み取ることができる。DeeJay たちはステージ・パフォーマンスを通して、「バッドマニズム」を体現するのであるが、これは「キリスト教徒」たちから批判される。したがってガディ・ガディのように DeeJay のキャリアのなかばにして回心し、「ゴスペル DeeJay」に転向した者にとって、自分がこれまで体得してきた DeeJay のパフォーマンス技法をどうするかが大きな問題となることは想像に難くない。この問題にガディ・ガディは、DeeJay のパフォーマンス技法を慎重に組み替えることで対処している。

ここで彼がパフォーマンスしている歌の中では、彼は「ガン・トーク」や「スラックネス」は歌っておらず、むしろ反対にキリスト教の道德倫理に基づいて「スラックネス」を批判するような歌詞を歌っている。この点では彼は DeeJay の表現方法を排除しているといえるが、歌詞ではなくパフォーマンス技法へと視点を移すと、DeeJay のパフォーマンスの典型的な技法が維持されていることがわかる。例えば、このパフォーマンスの中でガディ・ガディは、同性愛を間違いだと思う者は手を挙げるようにと観客に指示をする。ホモフォビアが強いとされるジャマイカにおいて、多くの人々にとってはこの間いかけに対する答えは明らかであり、ほとんどの観客が手を挙げる。この行為によって会場に一体感が創出される。同性愛者をスケープゴートにしたこの一体感創出の技法は、ダンスホールでよく見られるものである。

もともと、同性愛はキリスト教的な「罪」でもあるため、同性愛者の批判自体は、教会の礼拝でも聞かれる。しかしこの場面に見られるようなあからさまなスケープゴート化は、やはりダンスホールに特有の、攻撃性を含むものである。これは「キリスト教徒」たちには違和感を覚えさせかねない。

これに加えて、「ガディ・ガディを見ている。俺をよく見てろよ。」「聞けよ。シッ。」「音量、音量!」「ゆっくり演奏しろって言ってるだろ!」などの、観客やバンドに対する指示のしかたも、ある種の横暴さを含むものである。牧師が派手なパフォーマンスを行うことが多いペンテコステ派やカリスマ派の教会の礼拝でも、牧師と演奏者との掛け合いが展開され、その中で牧師から演奏者への指示が出される。しかしその場合にはここで見られるようなあからさまな命令ではなく、より微細な、目配せや手を使った合図であることが多い。注目を促すために会衆に出される指示も同様である。ガディ・ガディは牧師であることも自称しているだけに、スーツを着用してステージ上に立つ彼の姿は教会の壇上に立つ牧師の姿を彷彿とさせるが、同時に DeeJay 由来の彼のパフォーマンス技法は、あまり「キリスト教徒」が表立って見せることのない、攻撃性や横暴さを含むものである。

このように、ガディ・ガディは攻撃性、横暴さを表現する DeeJay のパフォーマンス技法を、キリスト教の道德倫理からは完全に逸脱しない範囲で行って見せている。その攻撃性、横暴さの表現は前章でみた「バッドマニズム」の基本的要素である。つまりガディ・ガディのパフォーマンスは、キリスト教の道德倫理の許容範囲内で、「バッドマニズム」を操作

的に再構築したものだといえることができるだろう。

さらにガディ・ガディは「キリスト教徒」男性のイメージも操作している。これは彼が頻繁にステージ上で披露する「証し」²³⁾の中に見ることができる。この「証し」は彼が回心した際の体験に基づくものである。彼はかつてコミュニティでも有名なギャリスト (gyalist)²⁴⁾であったが、回心して妻だけに誠実になると、「ソフト」になったといって嘲笑されるようになった。彼は最初そんな自分を恥じていたが、ある日、神から語りかけられるという経験をし、自分の行いに自信を持つようになる。その後、教会に通う彼に向かって男たちが近づき、「あっちに行け！ 古ぼけワン・バーナー！」と擲揄を飛ばす。「ワン・バーナー」とは、火口がひとつだけの調理コンロのことであり、一度に一人の女性しか相手にできない男への侮蔑表現でもある。この擲揄に対してガディ・ガディは、ふんぞり返ってポーズをとり、腰に手を当てて彼を見つめ、言ってやったと言う。「いいか、聞けよ。ワン・バーナーのほうがいいんだ。なぜならワン・バーナーのほうが調理ガスは長持ちするからな！」

筆者は彼がステージでこの語りを行うのを何度か見たことがあるが、必ずこの箇所では会衆は笑いの渦に包まれる。観衆に笑いをもたらしているのは、ガディ・ガディが彼に向けられた「ワン・バーナー」との擲揄に対して、キリスト教的な道德倫理の主張（「神は婚外性交渉や婚前性交渉を禁じている」）という正論で対抗するのではなく、性的能力を証明する方法をいわば「多発性」から「持続性」へとずらすことによって（「ワン・バーナーのほうが性的な力が持続する」）、相手の鼻をあかすような切りかえしを行っていることである。これは、「キリスト教徒」男性が「男らしさ」を欠く存在として男性たちの間で蔑まれる原因となる単婚的性規範を本来の文脈であるキリスト教的道德倫理から切り離し、性的能力の競い合いという「男らしさ」の文脈に置き換えるという操作でもある。これによりガディ・ガディはキリスト教的な道德倫理の許容範囲内で自らの性的能力の強さを主張することを可能にしているのである。

ここまで見てきたように、ガディ・ガディのパフォーマンスは、「パッドマニズム」や性的能力をキリスト教的な道德倫理の許容範囲内で表現するものであり、それを通して彼は「男らしい」「キリスト教徒」男性のイメージを操作的に再構築しているといえる。

2-3 プロディガル・サンのパフォーマンス

プロディガル・サン (Prodigal Son)²⁵⁾もガディ・ガディと並び、現在の「ダンスホール・ゴスペル」を代表する「ゴスペル Deejay」の一人である。彼はこれまで3枚のアルバムCDを発売しており、その中には世俗のダンスホール音楽のヒット・チャートでも上位にランク・インした曲がいくつかある。また、自身で音楽レーベルも運営し、他のゴスペル・アーティストたちのマネージメントも行なったり、毎年8月に大型のゴスペル・コンサート「リチャージ (Recharge)」を主催したりするなど、実業家としての顔も持っている。そのような成功の一方で、2008年には彼のマネージャーも務めていた妻との離婚騒動が話題に

もなった。離婚後に元妻が彼の家庭内暴力や浮気を暴露した自伝を出版したことで、彼の人気にも陰りが見えている。

その顔立ちは特に端正というわけではなく、どちらかというと無骨な印象を受ける。体格は中肉中背である。衣装には凝っているようで、あるときは三つ揃えのスーツ、あるときはTシャツとジーンズ、あるときはベストやマフラーなど、様々な着こなしを見せる。

プロディガル・サンは1976年に生まれ、キングストンに隣接するセント・キャサリン教区の田舎で祖母に育てられた。13歳のときに祖母が亡くなり、キングストンの悪名高いインナー・シティ、リマ（Rema）に移り住んだ。そこではギャングの一員として銃を手に入っていたという。この時期のことは彼自身もメディア等で頻繁に言及しており、ここでみるパフォーマンスの際にも、曲の合間に次のように述べた。

シャッタたちは皆、俺がかつてストリートを仕切っていたことを知っているよ。俺たちは……俺たちはブローニング銃を前のポケットに入れ、青い聖書²⁶⁾を後ろのポケットに入れていた。それからたぶん、真ん中のポケットにはウィード（マリファナ）の袋が一つ。そんな感じだったよ。

彼は1997年に回心している。彼が回心に至った経緯はメディアやステージ上ではあまり語られないが、彼が回心後に通っていたチャーチ・オン・ザ・ロック（Church on the Rock）というカリスマ派教会の伝道集会がきっかけだったようだ。彼が「ゴスペル DeeJay」としての活動を開始したのも、この教会を通じて、同時期に回心した有名プロデューサーに出会ったことがきっかけである。それ以前には彼は本格的な音楽活動を行ったことはなかった。そのためか、彼のDeeJayのスタイルには、ガディ・ガディのような技術の高さは感じられない。彼の成功は、むしろ彼の過去の経歴を利用した、イメージ演出によるところが大きいように思われる。

ここでは2009年4月2日（木曜日）の夜にキングストンのマックスフィールド通り（Maxfield Avenue）で行われた伝道集会で、プロディガル・サンがゲスト・アーティストとして行ったパフォーマンスを参照し、彼のイメージ構築を考察する。マックスフィールド通りは市内でも犯罪多発で悪名高い場所である。この伝道集会は貧困地区で「ダンスホール・ゴスペル」を用いた伝道活動を行っているブレイズ・ハウス・ボンバーズ（Prayz House Bombards）と呼ばれるグループとこの通りの近隣にあるペンテコステ派の教会が協力して開催した。通りに面した小さな日用品店の前の歩道にベニヤ板の小さなステージが組み立てられ、その両脇に高さ3メートルほどの大きなスピーカー・セットが通りに向かって積み上げられている。ステージの斜め後方に立てられた折りたたみ式テーブルの上には、ミキサーやターンテーブルなどの機材がセットされており、それをMCの男性が操作している。ステージを照らす照明は無く、街灯の薄明かりだけがあたりを照らしている。ダンスフロアになるのは車道である。人々の多くは両側の歩道に立って、ステージのほうを眺めている。壁にも

たれかかっている人や、物売り用のテーブルらしきものに腰掛けている人もいる。聴衆の人数は50名くらいだろうか。多くは女性だ。音につられてちょっと表に出てきた、といった感じの服装の人が多く、教会の集まりでは見られない、短いスカートをはいた若い女性たちも数人いて、踊っている。場が盛り上がると、人々はどっと車道に溢れだし、車道を占拠して踊る。通りかかった車は速度を落とし、人々がよけるのを待って通り抜ける。路上ダンスホールでよく見られる光景である。さも楽しげに積極的に踊っている人もいれば、軽く体をゆするだけの人も、腕組みをして遠巻きに傍観している人もいる。



(写真3) マックスフィールド通りでのプロディガル・サンのパフォーマンスの様子。2009年4月2日（木曜日）。筆者撮影。

伝道集会の終盤、23時を回ったところにMCの紹介を受けてステージに上がったプロディガル・サンは、拍手で迎えらる。デザインの入ったジーンズ、チェック柄のセーター、マフラーに帽子という亜熱帯の夜にはいくぶん暑苦しいファッションに身を包んでいる。マイクを持った彼は観衆と少し言葉を交わした後、すぐに用意した音源をかけるようにMCに指示する。スピーカーから流れてきたのは、彼のヒット曲「ケッチ・ア・ファイア（‘Ketch a Fire’）」。伝統的な賛美歌をモチーフにした「ダンスホール・ゴスペル」である。この種の曲は特に女性や子供に人気がある。このときも音源がかかると瞬時に、何人かの女性が曲を認識し、熱狂的な歓声を上げ、踊り始める。この曲を歌い終えた後、彼は次のように述べた。

俺たちはゲットーの出だよ。俺たちはギャリソン(garrison)・ピープルさ。わかるかい？

俺たちはギャリソンを心から愛している。俺たちは代表するのを止めないよ、たとえ……俺たちはキリスト教徒だとしても、一生ギャリソンさ。

ここでプロディガル・サンは、自身を「キリスト教徒」でありながら「ギャリソン」でもある者として自己呈示している。ジャマイカでは「ギャリソン」という語は、かつて政党と癒着していた地域のギャング集団およびそれが統制力を持つ地域を指す言葉として使われる²⁷⁾。そのような「ギャリソン」は銃犯罪のイメージと結びついており、当然キリスト教の倫理観とは相容れない。そのため「キリスト教徒」だが「ギャリソン」でもあるという言明は逆説的な響きを持つ。それはプロディガル・サン自身が「キリスト教徒だけど (but)、一生ギャリソンさ」と、両者を逆説的に接合していることにも表れている。

この語りに続いて、彼がパフォーマンスした3曲は、「キリスト教徒」だが「ギャリソン」でもあるという彼のアイデンティティに基づいた男性イメージを表現するものだった。最初の曲は、「頭を冷やせ (‘Head Cyaan Hot So’)」²⁸⁾。これは彼の最新曲で、ビデオも作られ、テレビで放映されている。ダンスホール音楽のランキング・チャートでも、上位にランク・インし、「キリスト教徒」ではない人たちの間でも人気がある曲だ。この曲では「ギャングスタ」への語りかけがされている。その一部では、「ギャングスタ、本当のことを教えてくれよ、ギャングスタ / 本当のギャングスタはアナンダ²⁹⁾を殺したりしないだろう」と歌われるが、ここでの「本当のギャングスタ」という表現には、ギャングスタの理想化が感じられる。

次に歌った曲は、「溶岩の大地 (‘Lava Ground’)」³⁰⁾。若い「キリスト教徒」の間でたいへん人気がある曲だ。この曲では「銃を持っているかのように聖書を撃て」と歌われる。「ブラッッッッッッッッッッッ、悪霊の血を流させろ！」と、銃声を模した歌詞が歌われる箇所は特に聞き手にうけている。ここでは銃は聖書にもとづいた言葉を発することの比喩として使われているが、やはり銃を持った「ギャリソン」的なイメージも喚起され、それが人々に喜ばれているといえる。

3つ目の曲は、「ギャリソンへ戻れ (‘Back to the Garrison’)」³¹⁾。この曲では、実在の地域名や人物名を織り込みつつ、ギャリソン・コミュニティの「ドン」に代わる存在として有名な牧師やゴスペル・アーティストたちを送り込むイメージが歌われる。また「ラディカルなキリスト教徒がストリートを取り戻すぜ」と歌う箇所もある。彼は最初のアルバムCDのタイトルを『ラディカル・プロディガル』³²⁾としたり、自身の運営するレーベルの名前を『ラディカル・コミュニケーション』と称するなど、「ラディカル」という言葉で自身を表現することが多い。

この3曲のパフォーマンスを通して、プロディガル・サンは「キリスト教徒」だが「ギャリソン」でもあるというアイデンティティに基づき、かつそれを補強する男性イメージを表現している。「ギャリソン」と「キリスト教徒」はふつうは相容れないイメージをもっている。この相反するイメージを接合する操作を通して「ギャリソン」のイメージは肯定

化され、「キリスト教徒」男性のイメージは「ラディカル」なものへと変化させられている。この「ラディカル」なキリスト教徒男性のイメージも、ガディ・ガディの場合と同じく、「バッドマニズム」をキリスト教の道德倫理の許容範囲内で表現したものだといえるだろう。

3 「ゴスペル DeeJay」の男性イメージが教会コミュニティに与える影響

この章では、前章でみた「ゴスペル DeeJay」が再構築し体現する男性イメージがどのように教会コミュニティに影響を与えているのかを見ていく。

たしかに「ゴスペル DeeJay」に対しては否定的な意見も聞かれる。しかしその一方で、「ゴスペル DeeJay」たちは若い「キリスト教徒」たちのよいロール・モデルとなる、と期待する声も聞かれる。例えば、筆者の調査中には、「情熱と純潔 男性の章 (Passion and Purity Men's Chapter)」という思春期の男性「キリスト教徒」向けのセミナーが開かれ、ある「ゴスペル DeeJay」がゲストとしてパフォーマンスを行った。後日、このセミナーの企画者の男性にインタビューを行ない、「ゴスペル DeeJay」に対する評価を尋ねたところ、彼は「ゴスペル DeeJay たちは、あちら側で大きな (big and large) ことをして生きて、たくさんの困難を経験し、それでも清くとどまっているというイメージをもっている。それはただ閉じこもっている (being in the four walls) だけのキリスト教徒というイメージとは異なり、男性たちが自己同一化したくなるものだ。それは男性たちに訴えかける最も効果的な方法となり得る。」と語った。この他の教会コミュニティ内外の男性に向けた催しでも、「ゴスペル DeeJay」が招かれてパフォーマンスすることが多かったが、それは単にエンターテインメントの提供や人寄せためという以上に、「ゴスペル DeeJay」たちが体現する「男らしい」「キリスト教徒」男性のイメージの提示という意味が大きいということが彼の言葉から読み取られる。

伝道集会でも、「ゴスペル DeeJay」が招かれ、パフォーマンスを行うことが多い。例えば数名の「ゴスペル DeeJay」が通うあるカリスマ派教会は、毎週日曜日の夜に近隣の貧困地区で路上伝道集会を行っており、この教会に通う「ゴスペル DeeJay」がしばしば招かれてパフォーマンスを行っている。彼らがパフォーマンスを始めると、たしかに路地に面したバーやトタンで囲まれた家屋から何人かの男性が姿を現し、興味深げに「ゴスペル DeeJay」のパフォーマンスを眺めている様子が観察できた。

このような伝道集会でも、「ゴスペル DeeJay」の男性イメージは、教会コミュニティ内部だけでなくむしろ外部にむけて積極的に提示されている。前章のプロディガル・サンのパフォーマンス場面にも登場した、貧困地区で「ゴスペル DeeJay」たちのパフォーマンスを用いた伝道を行うプレイズ・ハウス・ボンパーズを率いる男性は、「ゴスペル DeeJay」たちのパフォーマンスの合間にしばしば次のような語りをしていた。「教会の牧師たちは女に向けた説教をしている。だから教会には男が来ない。男たちを『救い』たいのなら、男たちに届くメッセージを説教しなくてははいけない。『強そうな男たち』はちょっと粗暴に話をし

たりする。『ゴスペル DeeJay』は、私たちが話しかけることができない男たちに話しかけている。もっと男たちが救われれば、この国がもっと安全になり、教会の女性の結婚相手も増える。」彼の語り表れているように、「ゴスペル DeeJay」たちの男性イメージは、教会コミュニティ内部の男性にむけて「男らしい」ものとして例示されるだけでなく、教会コミュニティの外部にむけて、伝道の糸口をつかむために、いわば「対話できる男」として戦略的に提示されるものにもなっている。このように男性に向けた催しや伝道集会では、「ゴスペル DeeJay」たちの男性イメージの戦略的な利用がされているといえよう。

このような男性に向けた催しや伝道集会を介すまでもなく、「ゴスペル DeeJay」が体現するイメージは、「ダンスホール・ゴスペル」の主な支持層である教会コミュニティの若者たちに影響を与えている。多くの社会、少なくとも西洋近代的な社会において、大人社会の権威に対して反抗的な姿勢を示すことは、「思春期」の若者たちに広く見られる傾向である [cf.ミード 1976:8-10]。音楽はしばしば、若者たちによるその抵抗の文化的表現のための重要な手段となっている [cf.ヘブディジ 1986:156-58]。ジャマイカでは大きな教会は青年部 (Youth Ministry) を設けているが、そこに所属する若者たちも、教会の大人たちに対して、時として音楽を用いて対抗的な姿勢を取って見せる。

例えば私が訪れたあるペンテコステ派教会の牧師は、「ダンスホール・ゴスペル」に対して、「教会に攻撃的な要素を持ち込むものだ」として批判的な意見をもっていたが、その教会の青年部の若者たちは、彼らが教会の敷地内で主催するイベントで「ダンスホール・ゴスペル」をBGMとして用い、また「ゴスペル DeeJay」をゲスト・パフォーマーとして招いていた。その場でこの青年部のリーダーである高校生の少女と会話をしたところ、つい先ほども年配の教会員から「教会で何という曲を流しているんだ」と咎められたという。しかし彼女は「これは私たちの企画なのだから、どんな音楽を流しても私たちの自由なのだ」と、意に介さない様子であった。彼女の言葉に表れているように、教会コミュニティの若者たちは、年配者や役職者が難色を示し、ときに非難するからこそ、ますます「ダンスホール・ゴスペル」を支持しているようですらある。

教会コミュニティの大人たちへの反抗を欲求する若者たちにとって、「ダンスホール・ゴスペル」はその反抗のきっかけをつくり、さらにその反抗的姿勢を心理・感情面で支える役割を果たしている。この役割は「ダンスホール・ゴスペル」にしか担えない。年配の「キリスト教徒」にも問題なく受け入れられる従来のゴスペル音楽では、彼らの反抗的姿勢を演出することはできないし、キリスト教の道徳倫理に反するメッセージをもつ世俗のダンスホール音楽は彼ら「キリスト教徒」の若者たちには受け入れ難いものだからである。この点で「ダンスホール・ゴスペル」は、年配の「キリスト教徒」がしばしば批判するものであり、なおかつ彼らと同じ「キリスト教徒」である「ゴスペル DeeJay」によって歌われる音楽であるがゆえに、彼らの反抗を演出することができるのである。

特に教会コミュニティの若い男性たちにとっては、「ゴスペル DeeJay」の男性イメージは、彼らのアイデンティティ形成のために重要な意味を持っている。

教会コミュニティは、若い「キリスト教徒」男性たちにとって肯定的な自己イメージを築きにくい環境である。その理由の一つは、1章でみたように、結婚相手以外の女性との性的関係を放棄しなければいけないため、外部の男性たちから「ソフト」として軽蔑されるということにある。それに加え、次のような事情もある。「男性は女性を導く立場にあるべき」というのがジャマイカの「キリスト教徒」の男女の共通理解であり、牧師や長老(elder)、執事(deacon)といった教会コミュニティ内のリーダー的な役割は、ほぼ男性によって占められている。教会の牧師が雌鶏の群れを率いる雄鶏の比喩でしばしば語られる(1章参照)ように、このようなリーダー的な役割において自己の能力を示すことは、教会コミュニティにおいて、男性たちが「男らしさ」を示す主要な方法である [Austin-Broos 1997:123]。ところが、リーダー的な役割には「霊的に成熟した」年配の男性が就くことが多いため、若い男性に自己の能力を表現する機会が与えられることは少ない。そのため若い「キリスト教徒」男性にとっては教会コミュニティは肯定的な自己イメージを形成する機会が少ない場だといえる。

しかし「ゴスペル DeeJay」たちが人気を博すようになったことで、教会コミュニティ内の若い「キリスト教徒」男性たちがそれを模して DeeJay のパフォーマンスをするようになった。このことが状況を変えつつある。例えば、17歳のAが「ゴスペル DeeJay」を始めたのは、当時彼がまだ回心をしていない教会の参列者(church go-er)であったところに、ある「ゴスペル DeeJay」が教会の催しでパフォーマンスをし、少女たちから賞賛を受けているのを目にしたのがきっかけだった。自分もそのような賞賛を浴びたいという、「今思えば間違った」理由で「ゴスペル DeeJay」をはじめ、その後洗礼を受けて「キリスト教徒」になったという。このAの例にみられるように、「ゴスペル DeeJay」を模して教会の催しで DeeJay をすることは、女性たちの前で自分の能力を証明し、肯定的な自己イメージを得る機会となり、彼らのアイデンティティの変化を促すことがあるのである。

また、若い「キリスト教徒」男性たちのアイデンティティは、非「キリスト教徒」男性と自己を対比させることによって形成されるものでもある。この点で、「キリスト教徒」男性は「ソフト」であると外部の男性からしばしば軽蔑されるため、「男らしい」という自己イメージを持ちにくいという事情があった。しかし「ゴスペル DeeJay」を模したパフォーマンスを行う若い男性たちは歌の中でこの関係を逆転することができる。

例えば、23歳のBは精力的に活動する駆け出しの「ゴスペル DeeJay」である。彼は目立って身長が低く、そのことで人から笑われることもある。しかし、彼はそれを逆手にとり、歌の中では「ガンマン」「バッドマン」と対峙し、「罪とは高い建物のようなもの。悪魔が押せば、おまえはすぐに死んでしまうぞ。」とひるむことなく説得する様子をうたう。パフォーマンスの際には、目の前に立つ「ガンマン」「バッドマン」を下から見上げるようにして語りかけるポーズをとり、人々を笑わせている。これは、「ガンマン」「バッドマン」を踏み台とした、自己の能力の演出としてとることができる。前章でみたようにガディ・ガディやプロディガル・サンはパフォーマンスの中で非「キリスト教徒」を断罪していた。

そのやり方は、彼らを模して「ゴスペル DeeJay」をやっている若い「キリスト教徒」たちにも引き継がれている。これによって、彼らは「ガンマン」「バッドマン」に代表されるような非「キリスト教徒」男性との力関係をそのパフォーマンスの中で転覆することができ、それによってアイデンティティを肯定的に転化することができるのだろう。さらに歌の中では、多くの「ゴスペル DeeJay」たちがしているように、悪魔や誘惑、墮落などとの戦いを武器や戦争などの比喩を使って表現することで、自分の強さを表現できる。このことも、彼らが肯定的な自己イメージを築くのを助けているといえる²⁹⁾。

以上のように、「ゴスペル DeeJay」が操作的に再構築し、体现する男性イメージは、教会によって「男らしい」「キリスト教徒」男性のイメージとして男性に向けた催しや伝道の場面で戦略的に用いられ、また教会コミュニティの若い男性たちに影響し、彼らが教会コミュニティ内外に対して肯定的な「キリスト教徒」男性としてのイメージとアイデンティティを形成するのを促している。

考察と展望

ここまで「ダンスホール・ゴスペル」が教会コミュニティに与える影響を論じてきた。「ゴスペル DeeJay」たちのパフォーマンスの場は、ほとんどの場合教会の催しであるため、その影響が見られるのも主に教会コミュニティの内部である。とはいえ「ダンスホール・ゴスペル」の影響を、教会コミュニティに限定されたものとして考えるべきではない。なぜなら、既にみたように「ゴスペル DeeJay」たちのパフォーマンスが、伝道集会などで教会コミュニティ外部の人々に向けて行われており、また「ダンスホール・ゴスペル」が非「キリスト教徒」の間でも消費されているからである。プロディガル・サン曲などはしばしばジャマイカのポピュラー音楽のヒット・チャートの上位にも上り、非「キリスト教徒」の間でもよく知られている。また、「スラックネス」や「ガン・トーク」のイメージがつきまとう従来の DeeJay と違い、クリーンなイメージをもつ「ゴスペル DeeJay」たちやその楽曲は、企業や行政機関にとっても利用しやすい。例えばガディ・ガディは携帯電話会社がスポンサーとなっているタレント発掘型の人気テレビ番組でゲスト・アーティストとしてキャスティングされ、しばらくの間この番組に出演していた。また空港のお土産品店では、ジャマイカの民族音楽の CD や、海外でも有名なアーティストの CD に交じって「ゴスペル DeeJay」たちの CD が売られている。さらに独立記念日の祝祭イベントの一つとしてジャマイカ文化振興委員会が開催しているパフォーミング・アートのショー・ケース、「メロー・ゴー・ラウンド (Mello Go Round)」の 2008 年度大会では、出場した十数組のうち、2 組が「ダンスホール・ゴスペル」を使ったダンスをパフォーマンスしていた。これらは「ダンスホール・ゴスペル」の需要が教会コミュニティの外部にも存在していることを示している。「ダンスホール・ゴスペル」が教会コミュニティの外部で引き起こす社会的影響はまだはっきりとは確認できないが、このような需要が存在している以上は、今後その影響が

見られる可能性が大いにある。

最後に、本論で扱った事例を踏まえて、男性イメージの操作が社会に与える影響を考察するためにはどのような概念枠組みが必要なのかを論じておく。

本論の冒頭で述べたように、ジャマイカでは男性運動、政府の取り組み、メディアでの啓蒙プログラムによる男性イメージの操作が活発化している。「ゴスペル Deejay」たちの男性イメージの操作的再構築も、このような動きの一つとして数えることができるだろう。

しかしジャマイカを含む英語圏カリブ海地域の男性性研究では、男性イメージが構築され、その操作が社会に影響を与えているという視角がとられてこなかった。「はじめに」でも述べたように、英語圏カリブ海地域の男性性研究の中心となってきたのは、「周縁的」「無責任」といったカリブ海地域の男性のネガティブなイメージを見直すことを目的として西インド諸島大学が行った、男性のジェンダー役割や社会化に関する調査研究プロジェクトであった。このようなパースペクティブは、必然的に対象地域における一般的なジェンダーのパターンを取り出すことになり、その一般的パターンから外れた実践の存在はたとえ影響力を持つものであってもなおざりにされてしまう。これでは男性イメージの操作が社会に与える影響の考察は行えないだろう。なぜなら、操作によって作り出されるのは、一般的パターンにはまらない男性イメージだからである。

ジェンダー役割や社会化に注目する研究がもつ過度の一般化の問題を反省的に捉え、男性たちの間に差異が存在することを前提として、男性性を権力関係に着眼して読みととこうとするものとして社会学者コンネルが広めた「覇権的男性性」の概念がある [Connell 2005:76-78]。英語圏カリブ海地域の男性性研究でもこの「覇権的男性性」概念を用いた研究は増えている。しかし「覇権」という権力の固定性を示唆する概念が、変化がまさに進行しつつある状況における入り組んだ力関係の説明に適しているとは考えられない。この「ダンスホール・ゴスペル」についてのみ言えば、そもそも「キリスト教徒」男性と非「キリスト教徒」男性の間に「覇権」と呼ぶことができる固定的な権力関係があるわけではない。さらに「ゴスペル Deejay」による男性イメージの操作によって、少なくとも心理的な面では、「キリスト教徒」男性と非「キリスト教徒」男性の関係はより複雑にされており、それを「覇権」という概念を用いて整理することはできそうにない。

このように、英語圏カリブ海地域の男性性研究は、「ダンスホール・ゴスペル」の事例に見られるような男性イメージの操作とその社会的影響を検討するための概念枠組みを備えおらず、適切な概念枠組みを新しく作り出す作業が必要である。さらにいえば、この動きはジャマイカだけではなく、他社会にも同様に見られるものとして考えられるため、人類的な男性性研究にとっても、この概念枠組みは必要だといえる。

この新たな概念枠組みを作り出すためには、人類学における「客体化」の議論 [太田 1993:391, 前川 2004:88-134, 吉岡 2005:149-82]、あるいはジェンダー研究における「パフォーマティビティ」の概念が参考になると考えられる [バトラー 1999:228-48]。しかしそのどちらを参考にするにしても課題となるのは、男性個人が社会における理想的男性イメージ

や規範などに影響されながらもアイデンティティを操作的に構築するという主体論的次元と、それが他の人々に影響を与え、さらには社会的に共有された理想的男性イメージや規範を刷新するという社会・コミュニティ論的次元の間の循環性をどのように説明できるかということである。これは稿を改めて議論することとする。

<謝辞>

本論のもとになった調査研究活動は、日本学術振興会特別研究員制度（DC）の支援によって可能になった。ここに記して感謝申しあげたい。本論文を執筆するにあたり、指導教官である柴田佳子先生、所属プロジェクト・リーダーの岡田浩樹先生にはひとかたならぬご指導をいただいた。その他にも本研究科の先生方、学生諸氏から多くのご指導、ご助言をいただいている。また、二名の匿名査読者からも多くの有益なご指摘、ご批判をいただいた。以上の方々にこの場を借りて深く御礼申し上げます。

¹⁾本稿で用いる資料は主に 2008 年 8 月～2009 年 8 月、2010 年 2 月～3 月に行ったジャマイカの首都キングストンでの現地調査で得られたものである。この調査ではゴスペル・コンサートや伝道集会での参与観察、「ゴスペル Deejay」たちの音楽活動や日常生活の観察、彼らの作品の収集、教会関係者やゴスペル関係者に対するインタビューを行った。

²⁾1980 年代初期から「男性性（masculinity, manhood）」を主題とした研究が増加し、それらは「男性性研究」と呼ばれている。とはいえ、それらの研究に共通した「男性性」の定義があるわけではなく、各研究者がそれぞれの研究対象に合わせて操作的に「男性性」を定義している。本論では、意味範囲が広く議論の輪郭をぼやけさせかねない「男性性」という語を避け、「男性イメージ」に焦点を当てた議論を行う。ここでは「イメージ」を、箭内匡が美学者の岩城見一を引用しながらいうように、「意識に対して感覚的に現前するもののすべて」であり、「本質的に前-言語的な現象」として捉えておく【箭内 2008: 181,193】。本論で「男性イメージ」と呼ぶのは、現実の男性個人や架空の男性キャラクターなどによって体现されるこのような「イメージ」である。この「男性イメージ」のうち、あるものは「男らしい」として称揚され、男性のアイデンティティ、ジェンダー実践、セクシュアリティなどを方向づける。

³⁾ ジャマイカの人口の 90%以上が黒人であり、現地でこのような言い方がされるときには「黒人」の「ジャマイカ人男性」がイメージされている。2001 年の国勢調査（*Jamaica Population Census 2001*）によると、ジャマイカの人種・民族構成は、黒人が 91%、混血が 6%、インド系、中国系、白人はそれぞれ 1%未満である。人種・民族の境界線は明瞭ではないが、社会的上層になるほど肌の色が白く、反対に社会的下層になるほど肌の色が黒いという傾向は見られる。

⁴⁾ ジャマイカの男性が「周縁的（marginal）」であるという語りは、ジャマイカではよく聞かれるものである。それは、1950-60 年代にこの地で人類学者が行った家族形態の研究の中でも言われてきたように、男性が家族（世帯）において「無責任」で「周縁的」だというイメージや、失業率が高く、仕事を得られずに日中から路上でたむろする男性たちの姿が目につくということから喚起される、社会の中で男性が「周縁化」されているというイメージに基づいている。

⁵⁾ 同団体が資金援助を必要としていることを報じた新聞記事にみられた代表の説明より。（‘Fathers Inc seeks help.’ *The Gleaner* 紙、2010 年 6 月 11 日。）

⁶⁾歴史的に見れば、まずスペイン領時代のローマ・カトリック教会が、1655年のイギリスによるジャマイカ占領にともない駆逐され、英国国教会 (Anglican) にとって代わられた。この英国国教会は黒人奴隷への布教は行わなかった。18世紀後半にはプロテスタント諸派の伝道師がジャマイカに到来し、黒人奴隷に伝道を開始した。その中でも最も成長したのはバプティスト派であった。1860年代には欧米の信仰復興がジャマイカにも波及したが、この地では信仰心の高まりはアフリカの要素を含みこむかたちで現れ、「リバイバリズム (Revivalism)」という信仰形態が生み出された。1910年代にアメリカから渡来したペンテコステ派は、このリバイバリズムに似た霊的要素を持ちながらも先進国から来た真正なキリスト教教会でもあるという特徴によって、リバイバリズムの教会に通っていた貧困層の人々を吸収して成長したとされる。

⁷⁾登記局による2003年の人口統計 (Vital Statistics 2003) によると、すべての新生児のうちの83.6%が婚外子として生まれてきている。

⁸⁾ジャマイカにおいて、多くの男女の夫婦関係は、男性が母親とともに暮らす女性のもとへ訪問する「訪問夫婦 (visiting union)」から始まる。多くの場合、この関係の中で夫婦は最初の子供をもうける。そしてその関係が順調に進めば、その夫婦は同居を始め、「慣習法婚 (common law marriage)」と呼ばれる段階に入る。

⁹⁾2001年の国勢調査 (Jamaica Population Census 2001) による。

¹⁰⁾「母親中心家族」という語はR.T. スミスが1950年代の論文で初めて用いた用語である [Smith: 1996: 14]。「母親中心家族」は、男女の関係が「訪問関係」のまま女性が子育てを続けるか、夫婦同居の状態から夫が死別、あるいは離別をすることで形成される [Smith: 1996: 42]。

¹¹⁾日本などで言うラジオDJやクラブDJにあたる、音源を選択して機材にかける担当者はジャマイカでは普通「セレクトター (selector)」と呼ばれる。本論ではジャマイカで言う「デージェイ」をDeejayと表記し、彼らが上記のDJとは異なる存在であることを強調する。

また、Deejayと歌手 (singer) の中間的スタイルとしてシングジェイ (Singjay) と呼ばれるものも存在する。

¹²⁾一方、屋内で行われるものは「クラブ (club)」と呼ばれる。入場料をとるため、客の経済的階層は屋外で行われるダンスホールよりも高めであり、かけられる音楽の傾向にも違いがある。

¹³⁾「シャッタ」は英語の 'Shooter' にあたるジャマイカのクレオール語彙であり、ギャング集団に属するガンマンのことである。

¹⁴⁾彼らが回心した当時、その音楽は「レゲエ・ゴスペル」と呼ばれていた。「レゲエ」は「ダンスホール」のように「スラックネス」「ガン・トーク」を連想させず、より穏やかな響きを持っている。だが、「ダンスホール」のほうに彼らの音楽の特徴をより正確に言い表すため、現在では「ダンスホール・ゴスペル」という呼称がより頻繁に使われている。

¹⁵⁾カリスマ派教会は、ペンテコステ派の特徴をほぼそのまま継承しながら、ペンテコステ派ではないことを主張し、無教派 (non-denominational) の教会として活動している。首都キングストンには、いくつかの大きなカリスマ派教会がある。その礼拝には、ペンテコステ派の礼拝に比べて熱狂的な要素は少なく、牧師もより「知的」な説教を行っている。貧困層から広がったペンテコステ派と比べて、会衆には経済的中流層の人が多い印象をうける。ペンテコステ派ではアクセサリーの着用や、女性が帽子を被らずに礼拝に参加することは禁じられる傾向が強いが、カリスマ派の教会はこれらに対してより寛容である。

表1の統計調査では、カリスマ派のような無教派の教会に通う人は、「Other Religion Denomination」を選択回答したものだと推測できる。

¹⁶⁾彼が回心する2年前の1997年にはジャマイカの殺人事件発生率が世界最多と言われるほどにまで高まり、危機感が社会に広がっていた時期であった。

¹⁷⁾このコンサートは、毎年春休みのシーズンに行なわれているもので、ステージや音響設備の規模は国内最大級であるが、入場料は無料である。そのため、多くの観客が集まる。この年は西インド諸島大学の運動グラウンドで行なわれた。グラウンドの塀のすぐ向こうには貧困地区が広がっている。観客にはその貧困地区から音につられてやってきたという

風情の人も少なくなく、普段教会に通っているような人ばかりではないようであった。普通のコンサートと違い、会場ではアルコール飲料が売られていないが、そこかしこからマリファナの香りが漂っていた。もちろんキングストンから遠く離れた都市部からの送迎バスでやってきた人もいるなど、このコンサートを目当てに遠くから足を運んできた人も多かった。

18) ジャマイカでは庭先などに植えられていることの多い果樹。メロンほどの大きさになるその果実は、焚き火で丸ごと焼いた後に、切り分けて水で炊く調理法が一般的。

19) これは薬品を使った肌の漂白 (bleaching) に対する批判である。

20) これは「ガン・サリュート (gun salute)」と呼ばれる、ダンスホール空間における賞賛のジェスチャーである。

21) 英語の「態度 (attitude)」だが、ジャマイカでは、「度胸」「大胆さ」といった意味で肯定的に使われる。

22) 同性愛者を指すパトワ語の語彙。

23) 「証し (testimony)」は「信仰告白」と訳されることも多い。これは自分が回心するに至った経緯や、生活の中で経験した神の恵みについて、人々の面前で語ることである。

24) パトワ語で、「女たらし」のこと。男性たちの間では称賛を込めた意味合いで使われることが多い。

25) プロディガル・サン (放蕩息子) という芸名は、聖書でイエスが語る例え話 (「ルカによる福音書 15 章 11～32 節」) にちなんでいる。ある二人兄弟が父親から財産を分与されるが、弟は家を出、財産を放蕩で使いつくす。しかし悔い改めて帰ってきた彼を父親は温かく迎え入れるという話である。

26) 宗教団体により街頭で無料で配布されているポケットサイズの聖書。

27) キングストンには「ギャリソン・エリア」と呼ばれる区域が数多く存在する。ジャマイカの二大政党、PNP (People's National Party) と JLP (Jamaica Labour Party) は、1930 年代に形成されて以来、地域コミュニティに根ざした選挙活動で票を獲得し、その見返りにその地域コミュニティのインフラストラクチャの改善や住民への職の斡旋を行うというやり方で政治を行ってきた。その結果として各党の支持区域が形成された。さらに 1970 年代には各政党の政治家が自分たちの支持区域のギャングに銃を支給し、自分たちの区域をコントロールさせ、反対政党の支持者を襲撃させたといわれる。このように政治とギャングが地域コミュニティにおいて癒着することによってギャリソン・エリアは形成された。1990 年代にはギャングは麻薬の密輸によって資金を得るようになり、政治家たちを頼らなくなったが、地域コミュニティに根ざした政治は続き、ギャング間の抗争による殺人事件数もむしろ増加している。

28) アナンダは 2008 年に誘拐殺人事件の被害にあった女兒の名前。

29) また Deejay の歌唱法は、公用語の英語ではなく、多くの男性たちが日常会話で使っているパトワ語で行われる。これも彼らがより自然に自己表現を行うことを可能にしている。

<参考文献>

Austin -Broos, Diane. J.

1997 *Jamaica Genesis: Religion and the Politics of Moral Orders*. The University of Chicago Press.

バトラー、ジュディス

1999 『ジェンダー・トラブルフェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社。

Chevannes, Barry

- 1989 “Drop Pan and Folk Consciousness”. *Jamaica Journal* 22 (2):45-50.
- Connell, R. W.
2005(1995) *Masculinities* (2nd edition). University of California Press.
- Cooper, Carolyn
2004 *Sound Clash: Jamaican Dancehall Culture at Large*. Palgrave Macmillan.
- ギルモア、デイヴィッド
1994 『「男らしさ」の人類学』前田俊子訳、春秋社。
- Gutmann, Matthew C.
1997 “Trafficking in Men: The Anthropology of Masculinity”. *Annual Review of Anthropology* 26: 385-409.
- ヘブディジ、ディック
1986 『サブカルチャー—スタイルの意味するもの』山口淑子訳、未来社。
- Hope, Donna P.
2006 *Inna di Dancehall: Popular Culture and the Politics of Identity in Jamaica*. University of the West Indies Press.
- 前川啓治
2004 『グローカリゼーションの人類学—国際文化・開発・移民』新曜社。
- ミード、マーガレット
1976 『サモアの思春期』畑中幸子・山本真鳥訳、蒼樹書房。
- Miller, Errol
1986 *Marginalization of the Black Male: Insights from the Development of the Teaching Profession*, Institute of Social and Economic Research, UWI.
- 太田好信
1993 「文化の客体化—観光をととした文化とアイデンティティの創造—」『民族学研究』57(4): 383-410。
- Smith, Ashley
1987 “Pentecostalism in Jamaica”. *Jamaica Journal* 42:3-13.
- Smith, Raymond T.
1996 *The Matrifocal Family: Power, Pluralism, and Politics*. Routledge.
- Stolzoff, Norman C.
2000 *Wake the Town and Tell the People: Dancehall Culture in Jamaica*. Duke University Press.
- Vassel, Samuel C.W.
1997 *Understanding and Addressing Male Absence from the Jamaican Church*. PhD Thesis, United Theological College of the West Indies.

Wilson, Peter

- 1969 “Reputation and Respectability: A Suggestion for Caribbean Ethnography”. *Man* 4(2): 70-84.

箭内匡

- 2008 「イメージの人類学のための理論的素描－民族誌映像を通じての「科学」と「藝術」」『文化人類学』、73 (2): 180-99。

吉岡政徳

- 2005 『反・ポストコロニアル人類学－ポストコロニアルを生きるメラネシア』風響社。

<統計資料>

Jamaica Population Census 2001. Statistical Institute of Jamaica.

<ウェブ資料>

Register General's Department, Government of Jamaica, “2003 Vital Statistics,” 2006, <<http://www.rgd.gov.jm/2003-Vital-Statistics>>(30 October 2009)